

# LEADERSHIP CHALLENGE

## 大隈塾LCレポートvol.06

大隈塾リーダーシップ・チャレンジは9月9日（土）10日（日）、ワークショップ「稲刈り」を実施しました。今回ワークショップの目的は七つありました。

- (1)五感を取り戻す（特に足の裏と手の指先の感覚、嗅覚、聴覚、味覚）
- (2)自分が食べるものを自分で作ってみる（「食料自給力」をつける）
- (3)ライフスタイルを見直してみる
- (4)身体を動かす
- (5)意識的にのんびりしてみる
- (6)新しい料理、読みたかった本をゆっくり読む
- (7)自分の「仕事」を探してみる（「仕事」＝誰かやどこかの役に立つこと。「稼ぎ三割仕事七割」）



- (1)5月の陽射しと9月に陽射し、水を張った田んぼの匂いと稲が育った田んぼの匂い、蛙の声と蝉の声、オタマジャクシかザリガニか、マムシが出るかもしれない.....などなどいろいろと感じながら、素手で植えた苗から育った稲をカマで刈り取りました。
- (2)ほとんどの方が田植えと稲刈りの両方を、同じ田んぼで同じメンバーでやるのは初めてでした。刈り終えたときには、なんともいえない充足感があったそうです。ひとつは達成感であり、ひとつは自分たちが食べるものを自分たち共同作業でつくった、という協働体験によるものでしょう。
- (3)(4)でリフレッシュするだけではなく、
- (5)2日間、のんびりと過ごすのを意識していただきました。稲刈りは急がず、かといってダラダラとではなくチーム単位で。食事の用意もメンバーの有志「鳥貴族」（通称）が焼き鳥を。肉を串にさす、炭を起こして焼く、とやっていたいただきました。気持ちの枠をストレッチしていただきました。
- (6)特に2日目のアクティビティとして2時間、「料理をする」と「本を読む」グループに分かれてもらいました。朝、自分たちで積んできた野菜を20人分の食事に作り変える「エプロン隊」（通称）は、男女混成6人で勤めました。ほかは、じっくりと2時間、読書をしていただきました。
- (7)まだまだ、課題として残りました。

稲刈りは、ここ数年大雨にたたられて水田のまま稲を刈るという難業が続いていましたが、今回は早めに水を抜いて田んぼをひび割れさせる（＝水はけが良くなる）など、鴨川自然王国が新しい試みをしてくれたのと、天候がなんとかもったことで、ちゃんとした農作業の稲刈りとなりました。

大隈塾の田んぼは作業面積は1反5畝、およそ1500平方メートル。2日目も早稲田大学大隈塾のゼミ生が引き継ぎ、翌日無事刈り取ることができました。成果予定は9俵=540kgのコメになります。1人あたりのコメの年間消費量は約60kgですから、9人分にあたります。

#### 【受講生のレポートより】

##### 【稲刈りから得られたこと、気づき】

春は青い匂いがした稲がわずか五か月の間にすっかり大きく育ち、立派に穂を実らせていることや、春は山ほどいた蛙が秋には山ほどのバッタに主役が変わっていることで、植物や生き物の様子からも季節の変化を実感できることに純粋に感動できた。

鎌での稲刈りは、「速さ」という意味では決してベストではないが、これが本来の姿であることや、想像以上に使い方にコツが必要なことを知り、安易に便利さばかりを追い求めず、基本を知ることの大切さに思いを巡らせる機会になった。

今回の稲刈りで食料自給力を身につけたとは言えませんが、自分で食べるものを自分で作り、調理し、食べる。どれだけ難しく、たいへんなことかと思った反面、普段から食べ物を買って暮らしている自分にとって非常に贅沢な暮らしだとも思いました。

先ず稲刈りは田植えと比べて、簡単にこなせるものかと考えていましたが、想像以上に大変でした。稲刈りを通じ、機械化がなく、手作業で全て作業をしていたことに対し、如何に大変で重労働であったか感じながら取り組むことが出来ました。

一方、稲刈りを終えた瞬間には最近では感じられなかった充実感でいっぱいになりました。これから秋になり、大隈塾（王国の方々がいなければ成り立ちませんが...）で協力して出来た米を食べることが今から楽しみであると共に食料自給力を身に付けることを考えさせられる経験となりました。

泥沼の中で稲を刈り取らないといけない状況下、辛うじて刈った泥まみれの稲穂を田んぼの外にいる人に放り投げた。その瞬間、誰かが流れ作業でやろうと提案。

泥沼で刈る人。刈った稲を受け取る人。それを中継する人。田んぼの外で稲を縄で束ねる人。誰が言い出すわけでもなく、役割が決まる。自分は何ができるだろうかと、各々が考え、自然発生的にチームワークが出来上がる。

結果的に上手くいった。

振り返ってみると、作業が順調なままだったら「流れ作業」は思いつかなかったと思う。多少非効率でも個々人の作業で完結していたに違いない。逆境を迎えたからこそ、偶然投げた稲穂をきっかけに、何とかしたいという気持ちが湧きあがり、連携作業の発想が生まれた。

即席チームワークが上手くいった理由は、何より、「目的」を共有できたことだと思う。「技術・スキル・知識・経験」は大事だがその次かも知れない。そこに、早く休みたいから、早く飲みたいから、という動機があったとしても、「時間内に全ての稲を刈る」という一つの共通の目的に対して、各自が腹落ちして臨んだ。それはその場を一つにし、良い方向へ導いた。普段出来上がったチームの中では感じにくいですが、新しいチームっ



てこうやったら上手くいくのか、と漠然とだが実感した。小さな成功体験だったように思う

### 【2日目のアクティビティから得られたこと、気づき】

自然に囲まれながら、他者と会話することなく、リラックスして本を読むことで、従来以上に集中して読書することが出来ました。改めて、日々「何か」しないといけない、やらないといけないと意識・無意識の中で生活していることを実感しました。

2日間、意識してゆっくり過ごすことで普段の生活では気付かなかったこと、如何に無意識で時間を意識して、せわしなく過ごしているかを知ることが出来ました。これからは「意識」してのんびり過ごすことで、心身ともにリフレッシュして、仕事、家族、遊びに向き合い、充実した生き方をしていきたいと思えます。

料理班として、野菜の収穫から体験させて頂きました。野菜の収穫の際には、その野菜の特徴や収穫の際に気を付けることなどを教えて頂きました。普段スーパーでは綺麗な形をしたものしか手に取りませんが、農薬を使わずありのままの大きくなった野菜を収穫することで、農家さんの思いやそれに対する感謝の気持ちを持つことができたように思います。個人的にはカメムシがピーマンの汁が好物であること、オクラは上に向かって成長すること、ハーブは摘んだところからまた成長することが新たな発見でした！



意識的にのんびりする。なかなか普段のんびりしている時間を過ごしている、と思っても、「意識的に」となると非常に難しかったです。2時間のアクティビティでしたが、この「2時間」を作ることができない日常だけに、本当に貴重な時間でした。読書を選択しましたが、「意識的に」のんびり時間を過ごしたせいか、本の内容から連想することが普段より多く、同じ時間で読書したとしても、意識的にのんびり時間を過ごすほうが、リラックスしているせいか思慮が深くなると感じました。

私は読書を選んだが、参加者全員用意された自由な時間と選択肢を受け入れ、非日常を思い思いに楽しんでいた。休息する、立ち止まる、振り返る、そのような時間を敢えて用意頂いたのだと思う。これまでは五感を磨く、感性を鍛えるという観点から何か得ることに重きを置く内容が多かった。一方で、日常で少し疲れてしまっているだろう感覚を休ませることも、同じくらい大切だということ気付かせてくれようと思われた時間だったと思う。

村田さんは、アクティビティは、普段やらないことをやり、普段居ない場所に身を置き、わざとのんびりすることで感覚を解放する「五感のストレッチタイム」と仰っていた。

ストレッチできた！という確かな手ごたえこそなかったが、2日間山に籠ると、「初秋の空は高い」、「月は意外と早く動く」、「山の夜は寒い」、「5月は蛙の声、9月は虫の声が響く」、「山に吹く風は

気持ちがいい」、そんな普段感じられないことを感じる。だから、私でもそれなりに感性は緩んだ結果、東京に戻っても良いコンディションとなっている。



大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.06

2017年9月20日発行（通算37号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

153-0044 東京都目黒区大橋2-16-35

tel:050-3558-7527

mail:ookuma\_school@stonesoup.tokyo